

# 地域子育て支援拠点研修事業〈愛知開催〉

## 中堅支援者向け研修

### 〈開催概要〉

- 開催日 平成23年7月18日（月・祝）10:00～16:30
- 会場 ウィルあいち（愛知県名古屋市東区上堅杉町1番地）
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・（社福）全国社会福祉協議会・愛知県・名古屋市・岐阜県
- 協力 NPO法人子育て支援のNPOまめっこ
- 参加者数 136人（行政46名・NPO/任意団体70名・その他団体/企業8名・その他12名）

### 〈プログラム〉

#### ◆開会挨拶・主催者挨拶

財団法人こども未来財団 常務理事 安藤哲男さん



#### ◆主催者挨拶

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事・  
NPO法人くすくす理事長 安田典子さん



#### ◆プログラム1 基調報告 『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

【講師】 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室長 黒田秀郎さん

地域子育て支援拠点事業が始まった背景、事業の実施状況、これからの目標等を豊富なデータを基にわかりやすく説明していただきました。この事業は子育て現場の実践から始まった事業で、現場の声を反映させた事業であるということ。

「子ども・子育て新システム」の説明では、幼保一体化についても詳しく解説いただきました。予算、財源を踏まえた支援策、また最新の政策の動向を解説いただき、社会保障・財源にも目を配り、これからの子育て支援の動向に注目とのことでした。短い時間でしたが、行政の方から直接国の政策の動向などを伺うことができ、有意義な時間となりました。



◆プログラム2 基調講演 『地域子育て支援拠点事業における活動の指標  
「ガイドライン」について』

【講師】 日本福祉大学 教授 渡辺颯一郎さん

現代は核家族化が進行し、地域との関わりが薄れる中で、世代を超えた経験の受け渡しが断たれ、子育てに寛容でない社会の中で親は常に緊張した状況で子育てをしているということを様々な事例やデータを基に話してくださいました。親同士の支え合い（ピアサポート）の効果について触れられ、支援者は親同士を適度につないでいくという大事な役割があるということ。またこちらから地域に出向いてつながっていくこと（アウトリーチ）は、ひろば型、センター型、児童館型ともに地域子育て支援拠点事業の概要にも示されているということ。子どもの発達の基本となるサイクルを作るために、拠点が親子自身にとってゆとりを持って安心できる場であるべきことについてもわかりやすく話してくださいました。拠点はもう一度子育ての場を作り直すことができる場であるとも話されました。



◆プログラム3 分科会

＜第1分科会＞「配慮を必要とする子どもとの関わり」

～スタッフとして受けとめる力をはぐくむ～

【講師】 徳広圭子さん 岐阜聖徳学園大学短期大学部 准教授（社会福祉士・精神保健福祉士）

【コーディネーター】 安田典子さん NPO法人くすくす 理事長



徳広さん



安田さん

最初にゲーム形式で自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行いました。そして、子育て支援の経験年数が偏らないようにグループわけをしました。その後、徳広先生より支援拠点での多様なテーマを含んだ事例を提示され、1時間20分、事例に対する対応を検討しました。模造紙やポストイットなどを使ってまとめたグループもありました。

#### ◆事例検討の様子

- ・一つの事例でも、支援拠点の形態や立場によって対応が様々であり、幅広い意見交換ができました。
- ・いろいろな考え方、困っていること、気になっていることなどがグループ毎に話し合わせ、支援者同士のピアサポートの場になりました。
- ・事例に対して、否定的な意見や、寛容な意見が交錯する中、こんなふうにしてみたらどうかな？など、具体的な案や、スタッフ間の連携（チームプレー）での対応の実践例が多く出されていました。
- ・ワーク後は、グループ毎に発表をしました。参加者は、スクリーンに提示された意見交換の経過を見ながら、多様な考え方や対応方法を共有することができました。

#### ◆徳広先生の講義より要点の抜粋

- ・配慮を必要とする子については、「～が～である」という固定観念を持つのではなく、母親や支援者の経験から来る「感覚」も大切にすべきである。
- ・発達障害は「混在ケース」が多く、専門機関でも混在ケースは見つけにくいいため、適切な対処を受けることがなかなか難しい。
- ・どんな場合でも、保護者との関係作りが鍵であり、「聴く」という事で信頼関係を築いていくことが大切である。
- ・どんな支援拠点でも、様々な配慮が必要な子が来訪するという事を前提に、あらかじめ専門機関との連携の枠組みを作っておくことが必要である。  
ベースとなる保護者との「信頼関係」を築いた上で、「配慮を必要とする子」に対するスタッフの役割のひとつとして、早くその必要性を見いだすことも大事である。特に1歳児は「歩く・しゃべる」という発達の節目を迎えるので、様々なことに気づきやすい時期である。
- ・今日から何が出来るかを考える。（研修で得た事にすぐ取り掛かる）  
⇒ ガイドラインを読み直すことから始めるなど具体的に取り組むことが大事

徳広先生の講義を受け、コーディネーターの安田さんからは、現場からの視点や当事者からの視点で、地域子育て支援拠点スタッフの役割についてもう一度考えてみようと言っていました。

徳広先生の専門家としての見識に加えて、実践者である安田さんの経験や、多様な運営主体から参加されたグループワークの内容から、各自、多くのヒントをつかめたと思います。



## <第2分科会> 「拠点スタッフの役割

～利用者理解のために自分を知る・自分を見つめる～

【講師】 渡辺颯一郎さん 日本福祉大学 教授

【コーディネーター】 松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

簡単なアイスブレイクの後、「ひろばに来た母が椅子に座って、傍らで遊ぶ子どもを見ながら」という設定で6グループに分かれてのロールプレイ。「誰も知り合いがきていない場合の様子」・「疲れた、もう何もしたくない場合の様子」・「うちの子はどうしてということが聞けないのという想いの様子」などパターンをそれぞれ一つ決めてグループごとに演じ、それをそのグループ以外の残りのみんなでどのパターンを演じているのかを当てるといったものでした。日頃ひろばに来ている保護者がどんな様子でいるのか、またそれをスタッフはどのようにして感じているのかを映し出すようで大変興味深いワークとなりました。その後、グループ内でペアを作り、傾聴のワークを行いました。「地域子育て支援拠点での私の悩み」をテーマに話し手・聞き手を意識して、聞き手は相手の話を聞きだすように相づちを打ったり、開かれた質問（返事がYES/NOでは終わらない質問）をして相手の話をもっと引き出したりするなど、試行錯誤しながら会話をするものでした。この役割はすべての参加者が体験することが目的でもあるので、時間を十分にかけて実施されました。最後に全員でふりかえりを行い、グループの一人ひとりに一言コメントをプレゼントしました。支援者として「アドバイスすること」が必ずしも必要ではなく、話した相手はその悩みについて考え、答えを出そうとすることの大切さを支援者として導けるようにしていくことが大事だという話がとても印象に残りました。



講師の渡辺さん(左奥)とコーディネーターの松田さん(右)

## <第3分科会> 「地域の中で乳幼児家庭が安心できる拠点とは」

【事例報告】 佐竹直子さん NPO 法人多世代交流館になニーナ 代表理事

【コーディネーター】 中條美奈子さん NPO 法人マミーズ・ネット 理事長

【コメンテーター】 丸山政子さん NPO 法人子育て支援のNPO まめっこ 理事長

### ・佐竹直子さんの事例報告

NPO 法人多世代交流館になニーナは、2000年に立ち上げた「三尺玉ネット」という子育てネットワークが、中越地震後、多世代交流の必要性を重んじ、仮設住宅の空き住宅を活用して多世代の交流の拠点として立ち上げたのが原点。



中越地震の時には、仲間の安否確認から始まり、「人とつながれば、ものはなくとも大丈夫。」という気づきから、当事者目線での子育て防災冊子「あんしんの種」を作成されました。そのつながりは、「被災地対応検討委員会」に発展し、社協・行政・情報発信 NPO・コミセン・企業・地域防災などとの連携も確立されました。そうした経験をもとに、「日頃から災害後のイメージをして備えることや役割を考えておくことが大事で、安心できる人・情報・場所、そして、同じエリアでなく少し遠い団体とのネットワークを作っておくことも役立つことがあります」と話されました。

また、「被災者は、支援されるばかりでなく、支援される人が支援する人になることで自信が生まれて力をつけていくので、その仕掛けを考えることも必要です。そして、何よりも支援者は無理をし過ぎず、健康であることが第1ということもお願いしたい」と結ばれました。



佐竹さん



中條さん



丸山さん

### 【グループワーク】

- ・拠点で、乳幼児家庭が安心できるために備えておくべきこと」を付箋に書き出しました。多くのグループが、【避難訓練の必要性】【利用者の把握】【備蓄】【地域とのつながりの必要性】【拠点としての役割】などの見出しで各項目をまとめられていました。
- ・丸山さん、佐竹さんからは、「地域の学校とはどうつながったらいいのか」「長期的な支援をする視点を持って」「拠点の役割をどう捉えるか、たとえば、子どもの遊び場としてはどうか」などの補足コメントや提案があり、その後、備えておきたいものを追加項目として書き出し、どことつながり協働すると良いか、といったことについても話し合い、グループごとに発表をしました。
- ・グループ発表を受け、丸山さんからは、日ごろから地域と顔をつなげておき、共同でイベントを開催することなどの意義や、行政などとのつながりを持つ際のヒントが話されました。
- ・佐竹さんからは、「災害時における避難訓練も大切だが、スタッフと一緒にマニュアル作りをして何度か訓練をしながらスタッフとマニュアルの手直しをしていく作業を心がけてほしい」というアドバイスもありました。さらに、災害時に、被災者にかけていい言葉、いけない言葉などのレクチャーもありました。また、「地域子育て支援拠点には、中間支援の役割もあり、助け合う関係をつくる支援者として、コミュニティー能力も高めてほしい」と結ばれました。
- ・丸山さんは、「東海エリアでこういう話し合いの場が持ててよかった。町内会などとの地域連携も大切だが、まずは、団体のスタッフをもっと巻き込んで団体としての意識も高めたい」と話されました。
- ・中條さんからは、「地域子育て支援拠点として地域の防災計画を確認しておきたい。乳幼児を家庭で育てる人たちの様子を把握している立場から、日頃から行政や利用者に対して、提案し情報を伝えていく役割もある」と結ばれました。